
仮面ライダーマギア -Masked Rider Magia-

禍原 無尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーマギア - Masked Rider Magia -

【Nコード】

N6703R

【作者名】

禍原 無尋

【あらすじ】

「私は魔法少女じゃない——仮面ライダーよ」

魔女との戦いを独り行く少女……暁美ほむら。仮面を被り、時空を越えて戦う彼女の願い、その行く末は——。

魔法少女まどか マギカ×平成仮面ライダーシリーズ、コラボ二次小説です。つまり独自設定の塊と。

ほむらを主人公に描かれる、本編とは異なるまどか マギカの物語……お楽しみいただければ。

第1話「悪夢は塗り変えるもの」

白い闇を追う。追いかける。一見かわいらしい、ぬいぐるみのようなそれを、駆け逃げるその生物を、追い詰めていく。

やらねばならない。殺^やらねばならない。全てが終わる前に。全てを終わらせるコイツを、コイツだけは許すわけには、逃すわけにはいかない。

白がつまずく。倒れ込む。今だ。

曉美ほむらは投げた。自分の能力が生んだ黒い塊、片手に収まる程の円筒^{バクダン}を。

炸裂。耳を射る轟音。黒から噴いた炎が瞬間、狭い通路一杯に広がる。自分でも初めて体験する威力に足を止めてしまい、誰かに見つけられはしないかと、今さら安穩としたことをほむらは思った。

——誰の目があるうと関係ない。これが私のやらなければならな
いこと。私の、使命——。

炎が散っていく。煙が流れ、ほむらは一度変身を解除して、白い生物の死体を探した。あれだけの爆発……いや、果たしてアイツがこの程度で死ぬかどうか。懸念は現実となる。

爆発の後には、何も、残ってはいない。

まだ近くにいます。ほむらは駆けた、白の気配を追う。間もなく足元に血の跡。すぐ傍だ。

血の跡が途切れ、その先、排気口の網が抜け落ちている。この下――人の気配に、嫌な予感を覚えつつ、飛び降りる。

居たのは、絶対にいてほしくなかった相手だった。

「……ほむら、ちゃん？」

色素の淡い髪を、赤いリボンでアップに二つ結んだ少女。小動物のようなつぶらな瞳が、驚きと混乱をない交ぜにして揺れている。見滝原中学のベージュの制服は、抱えた白い生物から流れる赤い血で汚れていた。

鹿目まどか。そしてキュウベえ。

出・会・っ・て・し・ま・っ・た――！

足下が抜け落ちる感覚。そのまま崩れ落ちそうになる体を、屹立のままに留める、必死に。挫けている場合じゃない、今だって、まだ間に合う。

「ソイツを放して」

「え……」 まどかの戸惑った顔が怯えに染まる。「いやだよ……乱暴しないで」

駄目だ。ソイツは。そんな優しさをかける相手じゃ。

「この子に何するの……？」

「貴女には関係ない」

そうだ。これ以上関係してはいけない。早くソイツを放して。でない、貴女は――。

声にならない言葉を、何とか発そうとした刹那、ほむらの視界を白が埋め尽くした。

――煙！？

腕で口を覆う。微かに吸い込み咳き込んでしまった。その隙に、

「まどか！ こっち！」

忘・れ・は・し・な・い、通る声。白く煙る視界に、活発そうなショートカットの少女が躍り出て、まどかの手を引いて連れ去っていく。

美樹さやか――待って！

煙の壁を破って飛び出すも、既にほむらの視界にはさやかもまどかもいない。

追わなければ――動こうとしたその時、世界が、歪み始めた。

ショッピングモール裏の薄暗い通路が、書き換えられていく、奇怪な草花が咲き乱れる、悪夢じみた絵画の光景に。歪な文字が宙を踊り、けたたましい笑い声が草花の間から漏れ聞こえ始める。この世ならざる光景――。

「結界……こんな時にっ」

惑う間はない。ほむらはまどかとさやかを追って異様の空間を走る。

「あの転校生！ 才色兼備に文武両道、前世の記憶と来て今度はサ
イコ野郎ってかあ？ キャラ立ちすぎ……！」

「……っ」

さやかと駆けながら、まどかは白い動物を抱えて、まだ戸惑っていた。転校生の暁美ほむら……夢に見た黒髪の美少女はまどかに訳の分からない言葉をぶつけ、今また小さな動物を傷つけている。どうしてこんなことを？ 何もわからないまどかの中で問いはぐるぐると回っていた。

「それ何？ 動物かなんか？」

「たぶん……」

遠慮ない言葉で聞くさやかにそう返す。友達の危機は迷わず助ける、そんな正義感を持つさやかでも、訳の分からないのは嫌なのだろう。でも、まどかも同じ気持ちだ。

「何これ？」 まどかが発そうとした言葉をさやかが呟いた。走るまどかたちの周囲が、景色が変わっていく。いつの間にか天井が抜け、白と黒のモノトーンが空を支配している。油絵の具を塗りたくったような家々が揺れ動き、変な形の文字が舞う。

「何なのよこれ……っ」

「わ、わかんないよお……!!」

まどかもさやかも足を止めてしまった。歪んでいく光景。二人の周囲に、奇妙な植物が集まり始めた。綿毛のタンポポのような、しかし口と髭を生やし、葉の代わりに鋏を伸ばしたお化け花。ケラケラと笑いながら近づいてくる。鋏を開け閉め、鋭い音を鳴らしながら。

「ねえ……夢だよな。こんなの、悪い夢だよねえ!」

「うっう……」

震えるさやかの声に、まどかは一緒になって震えるしかできない。お化けタンポポが歯を剥いて笑いながら、鋏をまどかたちに突き立てようとして――。

胸を押された。体が飛んだ。突き飛ばされた、気付いた時にはまどかもさやかもしりもちをついている。

目の前には、長い黒髪を異空間の風に揺らす、人形じみた硬い表情の美少女――暁美ほむら。

「あ、あんた……」

「下がってなさい」

ほむらは表情を変えず、さやかを見もせず、吐き捨てた。目線は目の前、群がるお化けタンポポたちに据えられている。

「ここから先は私の時間——貴女たちには触れさせない」

お化けタンポポたちが寄り集まる。耳に障る笑い声が幾重にも響いて、白い綿毛が混ざり合っていく。塊になったそれらの輪郭と色彩が歪んだと思うと、そこには四肢を生やしたタンポポの怪人が姿を現していた。両腕はやはり巨大な鋏で、首元から胸にかけて並ぶ多数の口と髭は奇怪な蝶ネクタイ、綿毛の塊になった頭に目はなかったが、怪人がほむらを睨み付けているのはまどかにもわかった。

ほむらの左手中指で、銀の指輪^{リング}が輝いた。変わらず無表情のまま、ほむらは指輪で右腕を撫でる。風車が回るような、バイクのエンジン音のような響き。指輪と右腕が光を発し、渦巻くその中心に、円形の黒い何かが現れた。右腕に取りついた大きなあれは…盾？

そしてほむらは、盾と右腕を腰だめにし、いつの間にか左手に収まっていた、金の拵えで飾られた紫に輝く宝玉を掲げた。

怪人を睨むその目にまどかは、ほむらの、決意を見た。

「——変身！」

振り上がる右腕と左手が交差する、刹那に宝玉が黒い盾の中央に装着された。紫の閃光が溢れ、ほむらと身に纏った制服を飲み込み、かき消し、弾けた。

美しく力強い女性の声が、悪夢の空間に響き渡る。

《Change, MAGIA!!》

紫光の去った後に、立っていたのはほむらであって、ほむらではなかった。白に黒に灰、暗色系のセーラー服のような衣装とロングブーツに身を包み、さらにはスカートの下の太もや首元、手指の先まで黒いタイツや硬い手袋に覆われ、彼女の肌は見えない。唯一白肌を晒した顔、その上の黒髪には、固そうなお面が、黒い仮面が引っ掛かっていた。生やした一本角の先は二股に分かれ、鬼のようにも、カブトムシのようにも見える。丸く大きな紫の目は、虫の複眼のようになっていた。

「な、何よあれ……コスプレ？」

「でも、変身……」

口を真一文字に結んだほむらが、カブトムシの仮面を被る。紫の複眼が光を発した。無表情さえ見えなくなった彼女は、黙したまま黒髪をなびかせ、タンポポ怪人に向かっていく。

タンポポ怪人は一瞬怯んだ様子で、しかしすぐにケタケタ笑うとほむらに向かっていった。両腕の鋏が振り上げられ彼女の首に迫る。思わずまどかは目を閉じそうになるが、その前にほむらは踏み込んでいた。鋏をかわし、あるいは盾で弾き、拳を突き入れる。よろめく怪人にさらにパンチの連続。最後の大振りの一発がタンポポ怪人を吹き飛ばし、地面に転がした。

「す、凄い……！」

まどかの声に気付くでもなく、仮面のほむらは髪をなびかせ、倒れたタンポポ怪人に近寄っていく。仰向けのタンポポ怪人は、突如跳ね起きてほむらに鋏を投げつけた。立ち尽くしたほむらは、しかし倒れるように転がって刃を逃れる。あらぬ方へ飛んだ鋏は、弧を

描いてさらにほむらに向かっていった。同時にもう一本の鋏を怪人が投げつけほむらを狙う。膝をついたほむらに鋏が――。

「危ないっ！」

さやかのか叫びと迫る鋏に、動じずほむらは右腕の盾に触れた。蓋が開くように盾が起き上がる。開いた盾の内部から何かを取り出すと、ほむらはそれを閉じた盾の中央――紫の宝玉に重ねる。押し込まれ取り付けられたそれは、装飾に金色の二本角を拵えた赤い宝玉。

《RE・MAKE UP, KUUGA!!》

力強い女性の声が、また響いた。ほむらの腕と脚が光を発してまどかたちの目を射る。瞬く間に、ほむらの腕と脚に黄金の装甲が装着された。籠手もすね当ても大きな赤い宝石が目立ち、表面には文字のようなものがいくつも描かれている。仮面の複眼は赤に染まり、金色の大小二対の角がさらに生えた。

ほむらは突き刺そうと迫る鋏の一本をかわし、開いたもう一本を左腕の籠手で受け止めた。閉じようとする刃が籠手に食い込むが、そこまでだ。ほむらが柄を掴むと、籠手とすね当ての宝石、仮面の複眼が緑に輝いて、鋏が歪んだ。またも瞬く間に鋏は銃か弓のようなものになる。金色の翼を模した装飾と本体の緑の模様が映える。

緑の弓銃ボウガンを構え、ほむらはその後端を引き絞った。あれが引き金トリガー

――気付いた時には彼女はそれを撃ち放っている。矢が悪夢の空間を裂いて飛び、タンポポ怪人を射抜いた。気持ち悪い液体を振り撒いてもんどり打つ怪人。

ほむらは跳んだ。タンポポ怪人に向かって、弓銃を振りかざす。

複眼と宝石が青く光り、弓銃がさらに歪む。直線になったそれ——青い棍棒を両手で掴み、ほむらは振り抜く。タンポポ怪人の綿毛の頭が真つ二つになって棍棒が体にめり込んだ。

「後ろっ！」

さやかの声、ほむらは空中を蹴った。怪人の頭を支点にして、槌子の原理で跳ぶ、すぐそばを鋏が突き飛んでいく。振り抜いた青い棍棒を、振り回してほむらは投げつけた。鋏と棍棒が激突し地面に刺さる。

着地して、ほむらは走った。突き立った鋏を拾うと、宝石と複眼が紫になる。構えた鋏は白銀の剣になり、両刃の切っ先が怪人目掛けて疾った。勢いのままほむらは怪人に剣を突き刺す。腹を突き破る刃に、怪人が気持ちの悪い絶叫を上げた。またあの液体が噴出する、被る前にほむらは飛び退いていた。

「やった……？」

さやかとともにまどかも笑みが零れる。しかし、

「まだよ」

ほむらはあくまで冷静だった。怪人は自ら剣を引き抜くと、割れた頭からほむらに向かって綿毛を撃ち出した。タンポポの綿毛とは思えない速さ、かわしたほむらの周囲で巻き起こる爆発。火炎の花が次々と咲き乱れ、ほむらは爆煙の中の影になっていく。

「ほむらちゃん！」

まどかの叫びも爆音に飲まれてしまふ。だが、それでもなお力強く、2色の女声が響く。

《RE・MAKE UP・KABUTO!!》

「クロックアップ」

《CLOCK・UP!!》

瞬間、爆煙の向こうのほむらの姿が消えて。

タンポポ怪人が全身から液体を噴いてよろめき。

倒れ込む怪人の向こうに、二丁拳銃を構えるほむらが立っていた。

「え……、な……」

さやかの呻きを、まどかは言葉を失いたただ聞いていた。瞬きする間もない時間の出来事——だがほむらの銃から上がる煙は、彼女がそこへ行き、それを撃つたことを物語っている。まるで時間を止めていたかのよう。いつの間にかほむらの仮面と衣服は緋に染まり、複眼は蒼くなっていた。

拳銃を投げ棄てるほむら。掲げた盾から、これもいつの間にか付いていた蒼い宝玉——先端が二股に分かれた一本角の緋い装飾が目立つ——を取り外す。全身が光り、仮面と衣服は元の黒に、複眼も紫に戻った。

「これで、決まり——」

盾の中に蒼い宝玉をしまつと、ほむらは盾の中央にある紫の宝玉を撫でた。宝玉が光り、あの力強い女性の声が呪文のような言葉を発する。

《S p e l l i n g E f f e c t / M A G I A ! !》

盾が紫の光を発し、その光が渦を巻く。大きくうねる、まるで風かざ車くるま。構えたまま、ほむらは告げる。

「ライダー、キック」

まどかが耳を疑う、その瞬間ほむらは飛び上がっていた。天高く舞い、中空で静止し、光渦巻く右腕を振るった。紫の光がほむらの全身を包み、落下する身体は盾が噴く光で加速して、急降下していく。

彼女の突き出した右脚がタンポポ怪人を貫いて。

吹っ飛ばされた怪人は転がっていき、轟音、紫の光を噴いて爆発した。

爆風と爆煙が吹き荒れる。着地したほむらの脇を抜け、まどかとさやかのところまで。顔を庇ったふたりは、吹き荒ぶ煙の中、立ち尽くしたほむらが、手袋に覆われた右手の人差し指を、肩の高さに小さく掲げたのを見た。

ほむらの表情は、黒い仮面と紫の複眼に隠されて見えない。

「何あれ……勝っちゃったわけ？」

立ち尽くしていたさやかが、へたりこんだ。まどかもとつくに座り込んでいる。抱えたままの白い生き物が、ぴくりと動いた。

「これで、後は——」

呟いてほむらがこちらを向いた。無表情の仮面が何かを——まどかの腕の中の、白い生き物を睨んだような気がする。

まどかは庇おうとして、しかしほむらの背後で、燃える怪人が身動きをしたのを見た。

「ほむらちゃん！」

「！」

ほむらが振り向く瞬間、その背後のタンポポ怪人が飛び上がり、両腕を広げた。燃える全身でほむらを包もうとして——。

「片付けるわよ」

聞き覚えのない声が、天から響いた。

同時に、乾いた音がいくつも鳴る、ファンファーレのような、銃声？ 降ってきた弾丸の雨が、怪人をまとった炎ごと穴だらけにする。

まどかもさやかも、ほむらも振り仰ぐ。そこには長尺の銃を無数にばらまき、今また巨大な大砲を構える、仮面の少女がいた。

「ティロ・ファイナーレ！」

巨砲が火を噴いた。またの轟音に耳が痺れる。狙い違わぬ砲撃はほむらのキック以上の爆発を引き起こし、怪人は巨大な炎の中にかき消されていった。巻き込まれそうになったたほむらは、また姿を消して、気付かぬ間にまどかの傍らに來ている。

緋い衣装と仮面のほむら、その手に生まれていた拳銃が、白い生き物に向けられていた。

「待つ……！」

「待ちなさい」

爆炎を背に、新たな仮面の少女が、ほむらに長銃を向けていた。薄い栗色のカールした髪に、羽根飾りの着いた帽子を乗せて、しかしその表情は仮面に包まれて見えない。中央の境界がなければ大きな一つ目に見える黄色の眼、あちこちを這う黄色のラインも目立つミニスカートのドレスは場に似つかわしくないほど可愛らしくて、まどかはどことなく彼女に親しみを覚えた。

「キュウベえをどうするつもり？」

黄色い仮面の少女が問う。ほむらは白い生き物——キュウベえ、だろうか——に拳銃を突き付けたまま、動かない。視線の読めない仮面は、恐らくは黄色い仮面の少女に向けられている。

世界が、景色が揺らいだ。油絵の家々が消え、モノトーンの空も後退していく。爆炎も爆煙も消えていく世界に飲まれ、後にはショッピングモール裏の通路が現れていた。

「戻った……？」

悪夢の世界は消えた。さやかと同じく、まどかもよくわからないながらにそれを認識した。遠くから聞こえてくるけたたましい音……サイレン？

「誰かが派手に爆弾を使ったせいで、警察が来るかもしれないわね」

「バクダン！？」

「それってまさか……ほむらちゃんか？」

ほむらは身を強張らせたまま、

「……クッ」

銃口をキュウベえから外した。黄色い仮面の少女も銃を降ろす。互に見つめあった、睨み合ったかもしれない二人は、同じタイミングで仮面を外した。

「私たちがいがみ合うのは無意味よ、巴マミ」

硬いままの表情を歪めて見つめるほむらに、少女・マミは垂れ目で弧を描いて、不敵な笑みを返した。

まどかの腕の中のキュウベえが身動きして、つぶらなその目を開く。

「……まどか？」

「私を知ってる？ やっぱりあなたなの？ 私を呼んだのは」

「私の名前を知っている……あなた、何者かしら？」

まどかの問いに、キュウベえは頷き、ほむらは、マミの言葉に動かない。

「魔法少女なんですよ……あなたも」

「違うわ」

はつきりと告げられた言葉に、まどかは、さやかは、マミは、キュウベえは、ほむらを見た。

透徹の瞳。ほむらは仮面を片手に身を翻した。黒髪がなびく。風を切り、独り去っていく、その伸びた背筋が眩く。

「私は魔法少女じゃない——仮面ライダーよ」

その場にいた誰もが沈黙した。その言葉の意味を計りかねて。

「……鹿目まどか」

「えっ」

まどかはほむらを見やった。ほむらは振り返り、肩越しに見下ろすようにまどかを見つめていた。

「あなたもそう」

ほむらの目は、変わらぬ固さで、しかしどこか、澄んで見えた。

「あなたも、魔法少女にはならないで」

言ってほむらはまた顔を背けた。……ほむらの瞳が、潤んだように見えたのは気のせいだろうか。

まだ遠いサイレンを聞きながら、まどかは昼間ほむらが語った言葉を何故か思い出していた。

——大切なものがあるなら、今とは違う自分になろうとしないで。

伸びた背筋に言葉を重ねて、まどかは独り行くほむらから、目を離すことができなかった。

第1話「悪夢は塗り変えるもの」(後書き)

次回、仮面ライダーマギア！

「貴女たちは騙されているのよ」

「キユウベえが……そんな」

「僕と契約して、魔法少女になってよ」

「命と引き換えにして、叶えたい望みって……」

「ほむらちゃんはどうな願い事をして魔法少女に……仮面ライダーになったの？」

「手を貸すわ、巴マミ」

「「変身！」」

「これが魔女の……」「本当の姿……！」

第2話「街を泣かせる闇」

——重ねる力で、悪夢^{みらい}を壊せ！

第2話「街を泣かせる闇」

「マミさん、今日は「ありがとう」ございました!」「」

声を揃えて頭を下げるさやかとまどか、その微笑ましさに、マミも笑みを返した。

見滝原中学の制服姿の三人は、夜の月光と街灯の下、マミの家のあるマンションの前にいる。

「いいのよ。こちらこそ、キュウベえを助けてくれたこと、改めてお礼を言っわ」

「いえ、当然のことはただけですよー。ね、まどか」

「うん」

朗らかに笑うまどかとさやかを、眩しく思う。キュウベえに魔法少女に選ばれたとはいえ、彼女たちはまだ何も知らない無垢な娘たちなのだ。だからマミは、自分の知る多くの事をまどかたちに伝えようと、家に招いた。紅茶とケーキ——亡き父と母の趣味を事その他喜んでもらえたことも嬉しかった。

彼女たちが魔法少女になるのが避けられないなら、自分が守り、導かねば——マミは胸の内でそんなことを考えていた。

「気をつけて帰るのよ。さっきの使い魔や魔女がいるかも」

「うへえ……またアイツら出てくるのぉ」

「ママさんの言うとおり、気をつけて、早く帰ろう、さやかちゃん」

「うん」

「それじゃあ、また明日ね」

「「はい」」

去っていく二人を、手を振って送る。魔女の結界に飲まれ使い魔に襲われたとはいえ、まだまだ彼女たちに危険に対する自覚はない。夜の闇に紛れて、怪しい影が忍び寄ることがないといいが……。

そう思いながらママは、マンションの前で夜空を仰いだ。

「もう降りてきて、姿を見せてもいいんじゃない？」

語りかけた相手を見つめる。夜空の上、浮き雲の向こう、満月の兎の前に、小さな影があった。月光を遮る人影——大きくなってママの元に舞い降りたそれは、暗色系の衣装をまとった少女、いや、魔法少女だった。

「気付いていたのね、巴ママ」

顔を上げる少女——まどかたちの言う、曉美ほむら、か——だがその表情は、複眼を備えた黒い仮面に隠されている。

ママは胸中の不審を笑みで覆った。魔法少女としての経験が取ら

せた、相手に優位を取らせないための強かさ。自覚と自嘲すら不敵に塗り込める。

「あなたの魔力はどう捉えても特殊なもの、直ぐに気付いたわ。物質変換に瞬間移動、あの攻撃力に加えて、空まで飛んでみせるなんて——あなた、本当に何者？」

「見ていたの、私の戦いを」

はぐらかすほむらの、仮面の無表情に苛立つ。もちろん顔には出さない。マミは笑みを保つ。

「あなたが敗れたなら、まどかちゃんとさやかちゃんは私が助けていたわ。あの使い魔の身体を縛り付けて……こうしてね！」

マミは右手を振り上げた。その動きに応じ、黄色のリボンがコンクリートから生え出し、いくつもほむらの身体に巻き付こうとする。

「無駄よ」

初手をかわしたほむらは、追い続けるリボンたちを前に、右腕の盾に手を翳す。

《RE・MAKE UP, KABUTO!! CLOCK・UP!
!》

女声の響きとともに、ほむらの姿が消えた。

「っ!」

唸った時には、冷たい感触がマミのこめかみに突きつけられている。ほむらの拳銃は見るまでもなかった。

「話を聞いて、巴マミ」

「話を聞いてもらう態度じゃないわね」

「お互いに、ね」

マミはほむらを見た。無表情の仮面は緋色に染まり、蒼い複眼が感情もなく、捉えたマミを無数に映し出していた。拳銃は冷たく向けられたまま。だが、マミも拘束魔法のリボンを展開したままだった。黄色い蛇が無数に揺れ動き、緋い衣装のほむらに絡み付かんと隙を探っていた。

「……確かに、話をする態度じゃないわね、お互いに」

マミは魔法を解除し、ほむらも拳銃を外した。リボンたちが解れて夜闇に消えていき、ほむらの衣装が見滝原中学のベージュの制服に変わる、戻る。

仮面を外したほむらは、硬い表情でマミを見つめていた。仮面が粒子になってほむらの手から消えるのを見ながら、マミは、

「それにしても、自分に銃を向けられるのは、気持ちのいいものじゃないわね」

「私も嫌だわ。できるなら御免被りたい」

冗談じみた物言い、表情を変えないほむらに、思わずマミは微笑

む。彼女も根は、あくまで中学二年生の女の子だと、そんな気がした。

「ふふふ……。ねえ、3度目だけど、聞かせてもらえない？　あなたは何者で、どうしてそんな力を持っているのか」

ほむらは、マミから目を逸らした。

「信じてもらえるか、どうか……」

「あなたは私を知っているみたいだけど、私はあなたのこと、何も知らないわ。知らない人を信じるなんて、出来ないじゃない？」

「……わかったわ」

伏せた目を上げて、ほむらはマミに告げる。

「バミミ、貴女は、貴女たちは騙されてるのよ。あのキュウベえに」

「キュウベえが、そんな……にわかには信じがたいわ」

暁美ほむらの話す内容は、マミにとっては荒唐無稽とさえ言えた。曰く、キュウベえはマミたちを自らの目的のために利用し、真実を伏せて魔法少女にし、魔女と戦わせている。曰く、ソウルジェムの穢れを祓えなければ、ジェムはグリーンフィードとなり、魔法少女は魔女になる——そんなこと、誰に信じられるというのか。

「全て本当のことよ。貴女が信じようが、信じまいが」

「……私にとってキュウベえは、命の恩人で、一緒に戦ってきたパートナーよ。出会ったばかりのあなたの言葉と、どちらが信じられると思う？」

「——信じてくれないのね」

「私には、あなたが未来から来たってことさえ疑わしいわ。それは、あなたの瞬間移動能力は時間操作ってことで説明は付くかもしれないけど。じゃあ他の能力は？」

「全て借り物よ。私の能力は、銃や爆弾を生み出すことらしいわ。その他の能力は、実際どんなものかすら私にはわからない」

「あなたは魔法少女になって日が浅い……そういうことにしておきたいのね」

「事実よ」

「少なくとも、あなたの中ではそうみたいね」

ほむらの、眉間に皺が刻まれる。より頑なになった表情に、微かに澀む煩悶。気持ちは察するが、だからといって彼女の話が信用できるかどうかは別だ。下手に信用して、万一の非常事態にまどかさやかを巻き込むようなことは避けなければならない。

「……悪いけど、今、あなたを信じるのは難しいみたいね。残念だけど」

「……信じてもらえないなら、私は私のやり方で戦うだけよ」

ほむらが踵を返す。初めて出会った時のように、独り去っていく。往きかけたその足が、不意に止まった。長い黒髪が振り返る。

「忠告しておくわ、巴マミ。
近い内に、貴女は、命を失う」

心臓が射抜かれた。全身が凍てつき感覚が消える。ほむらの言葉は、それだけ重くマミを穿った。

「……脅しのつもり？」 絞り出すのがやっと。張り付いた笑みをありがたく思う。

「予言よ。私の予言は当たる」

事も無げに言う。……マミは、自分がほむらの言葉を信じ始めていることに気付いた。

「死なないわ、私は」

マミはほむらを睨み付けた。

「魔女との戦いが命賭けだなんて、十分承知してるわ。もし死ぬとしても、たった一人では死なない。できる限り多くの魔女を倒し、みんなを助ける——私はそのために戦ってきたのよ」

「……そう」

ほむらの黒い瞳がマミを見つめる。透徹な眼が、仮面の複眼のよ

うにマミを映す。今、自分はどんな表情をしているだろう——それをマミが認識する前に、ほむらは目を伏せていた。

「忠告はしたわ。予言が叶わないように善処して」

また黒髪がなびく。ほむらは去っていく、振り返りはしない。

「言われるまでもないわ……私は死なない」

黒髪の後ろ姿にマミは呟く。だが、口をついて出た言葉に、胸が詰まった。

「……死にたくはないもの……」

巴マミをどうするべきか。それが当面のほむらの課題だった。あんなことをまた繰り返すわけにはいかない。だが、マミと手を携えることは、思ったより難しいらしい。自分の口下手さを呪いたくなる。

それでも、時間は流れる。歩みを止めるわけにはいかない。

マミだけじゃない。悲痛な運命の迫る彼女たちを、どうにかして守らなければならない。

翌日もほむらは、マミとまどか・さやかを気にかけた。マミはキウベエの精神感応テレパシーを利用して様子を探り、まどかたちはやや離れた位置から付かず離れず見守る。他人から見れば変態ストーカーじみているかもしれないが、気にはしていない。

マミはほどなく気付いたようで、昼休みには姿をくらまされた。ほむらがまどかたちに気を取られた一瞬だった。仕方なく、屋上に向かったまどかとさやかを見守る。

何のてらいもなくまどかの弁当を頼張るキュウベえが憎らしい。マミとの感応を断っているのがほむらに分かる辺り、こちらは適当に泳がされているのだろう。おくびにも出さない佇まいに、かつての惨劇を思い出して怒りに駆られるが、何度でも蘇る奴を今仕留める意味がないこともわかっていた。

奴とまどかたちの出会いを止められなかった以上、ほむらには何か一つずつでも、自分の知る出来事を、運命を変えていくしかない。

いつしかまどかとさやかは、『魔法少女になって何を願うか』について話していた。「命と引き換えにして、叶えたい望みって……」そう言って躊躇するさかとまどかは、賢明だ。誰しも叶えたい願いがある、でもそれが自分の命や他人の命を引き換えにしても叶えたい願いかどうかは、また別の問題だ。その結果が何を生むかも。

だが、わかっていても、その危うさにすがらなければならないときもある。想い人に願いを叶えるチャンスが与えられず、自分がそれを選ばれたことに煩悶しているさやかは、そうして願いを叶えて闇に堕ちたのだ。そしてほむらも――。

だから、ほむらは二人に姿を晒した。足音高く歩み出て、まどかたちに気付かせる。キュウベえの側にいる二人の、警戒は当然だ。さらに気付けば、こちらを見張っているマミの視線もあった。それでも、声を届かせなければならぬ。

「願いは決まった？ 鹿目まどか、それに美樹さやか」

「私は……」

「アンタには関係ないでしょ？ 何しに来たのさ！」

目を吊り上げるさやかの隣で、まどかはまだ惑っている。その惑いこそが大切なのだ。故あれば自分を棄てる、でも自分を捨てきれないさやかと違い、今のまどかはまだ自分と大切な人々を棄てられないし捨てられない、そういう気持ちでいる。だから可能性がある、運命を変えられる可能性がある。

「昨日言ったこと、覚えてるかしら」

「……うん」

まどかが見つめ合うほむら。脳裏に浮かんだ言葉を、きっとお互いに反芻している。――失いたくない大切なものがあるなら、今とは違う自分になるうとしないで。

「ならいいわ。忠告が無駄にならないよう、祈ってる」

「ほ……ほむらちゃん！」

踵を返そうとしたのを止められる。まどかは揺れる瞳で、しかし真っ直ぐにほむらを見つめていた。

「ほむらちゃんはどうな願い事をして、魔法少女に――仮面ライダーになったの？」

口元が歪む、僅かに。仮面ライダー——まどかがそう呼んでくれたことを、感謝すべきだろうか。それとも、運命を想い、呪うべきだろうか。

ほむらは右手を小さく掲げ、人差し指を空に向けた。その先には、どこまでも高く広がる青空。

「——天の道」

ほむらはその言葉の、重みを確かめながら呟いた。

「天の……」「道……？」 まどかとさやか戸惑い。ほむらは続ける。

「ある人が言っていた。『自分が変われば、世界が変わる。それが、天の道』……ってね。

でも変わる世界がどうなるかは、わかりはしないわ。自分が正しく変わったつもりでも、世界は歪んでいくかもしれない。

現に私はそういう人たちを見てきたわ」

まどかもさやかも黙っている。マミもほむらを見つめている、その気配を感じる。

「だけど、その人はこうも言っていた。『自分のために世界を変えるのは、天の道を外れたあり方だ』ってね。

私は、そういうあり方の馬鹿を止める。それが、あの人たちから魂を受け継いだ、私の使命——」

ほむらには、自分の願いは言えなかった。運命がまどかたちを苦

しめることはわかっていたから。マミなら耐えられると思ったが、
どうやらそれも叶うかどうか。なら、もう誰にも頼らない。自分の
力で、悪夢の運命を破壊してみせる。

「貴女たちも、そういう馬鹿になるなら、私の敵よ。覚えておいて」

言って、ほむらはその場を後にした。まどかたちの混乱は省みな
い。マミやキュウベエの不審も。それさえほむらが知る流れと異な
る出来事であり、運命へ投じた一石なのだ。

背負えるかどうか分からないこの決意だけが、今のほむらを支
える全てだった。

まどかには実感なんてまだなかった。既に魔法少女であるほむら
やマミと相對しても、奇怪な魔女の結界や使い魔を目の当たりにし
ても、どこか遠い出来事のように。キュウベエの言う「契約で叶え
る願い」も、現実味に欠けて想像もできなかったのが実際。可愛い
衣装ならいいな、と思うのが関の山で、何気なく書いていた衣装案
は、願いの成就を上條くん（おさななじみ）に重ねて現実的に捉え
ているさやかにも、魔法少女の現実を生きるマミにも笑われた。

それでも、実際に魔女のために自殺しかけた女性や、闘技場のよ
うな結界内で使い魔や魔女と戦うマミを見ていると、現実感がにわ
かに押し寄せてくる。

巨大な鳶に弾き飛ばされたマミが、こちらに転がってきた。まど
かとさやかを守る障壁に激突するや、ダメージのせいか、衣装が見
滝原中の制服に戻ってしまう。粒子になって消えた黄色い仮面の下

で、マミは苦悶の表情を浮かべていた。

「マミさん！」

「平気よさやかちゃん……チュートリアル 実演教習は、まだまだこれからだもの」

「でも、血が……！」

まどかの声に笑みで応えて立ち上がるマミ、その頬を、わずかに赤いものが伝う。

マミの背中の方こう、闘技場の緑の床の舞台リングには、怪物たちが群れ成していた。昨日マミたちが倒したタンポポ怪人に加え、身体の高ちこちで目を剥き、背中におぞましい模様の蝶々の羽根と無数の鳶を生やした怪人と、2種類の怪人が何体も湧いて出ている。その奥には、両腕を幾重もの蝶々の羽根にし、胸に大きな薔薇の花を咲かせた、緑色の植物怪人が鎮座していた。表情の読めない怪物たちに怯えばかりが募ってくる。

『マミを助けたいかい？』

気付けば、傍らにキュウベえがいた。怪人たちを見ていた丸い赤目が、まどかに向けられる。

『それなら僕と契約して、魔法少女になつてよ。そうすれば、君は戦うための力を得られる』

『私……私は……』

テレパシー 精神感知が宙に浮く。ただマミを助けたい、それがまどかの素直

な気持ちだった。だが同時に、心奥に沈む、声が問い掛けてくる――今の自分と幸せを捨ててでも、そうしたいのか――わからない。それも素直な感覚だった。

『――馬鹿になるのは止めるべきよ』

硬い声が、脳裏に響いた。次いで、轟音が重奏のように鼓膜を打ち衝ける。注ぎ込まれた銃弾の豪雨が、怪人たちを怯ませた。

仰ぎ見る。マミたちも。大型機関銃を投げ捨てて舞い降りてきたのは、黒髪の少女。

「ほむらちゃん！」

まどかは自然と咲いた笑みを隠さなかった。それを遮るように、マミがほむらを睨み付ける。

「何のつもり？」

「手を貸すわ、巴マミ」

ほむらの目は、怯んだマミを見据えていた。

「……なおさら、どういっつもりなの？」

「私の使命、聞いていたでしょう？
今の貴女は、私の敵じゃない」

「だから手を貸す、というの？」

「今の貴女と私の敵は、同じはずよ」

マミが齒嚙みしていた。さやかも、まどかもそんなマミを見守っていた。向こうでは、立ち直った怪人たちがこちらに進軍してきている。

「……わかったわ。とりあえず、この場はね」

「マミさん……」「マミさん！」 安堵したまどかに反し、さやかは納得いかない様子で、「きつとソイツ、マミさんを利用する気だ！」

「そうよ」

「……！」 鼻白むさやか。事も無げに言うほむらに、まどかの目も丸くなってしまふ。だがマミは、「上等よ」と笑んだ。

「お互い、目的のために、利用し合いましょう。今は、あの魔女を倒すために」

ほむらが左手を右腕にかざす。左中指の銀指輪シルバリングが右腕に、風車の音を立てて盾を喚び出す。そして、マミとほむらが並び立った。

「行くわよ」

マミに対し黙したまま、ほむらは右腕を腰だめに、左手を紫の宝ソウルジェムと斜め前へ突き出す。マミも淀みなく、黄色いソウルジェムを持った右手を上方へ高く掲げる。

「「変身！」」

二人が唱和した。それぞれのソウルジェムを、ほむらは振り上げた右腕の盾に装着し、マミは前方へ振り下ろし左手を重ねる。眩い閃光が二人を包んで、弾けた。マミの衣装は黄色主体に、ほむらの衣装は暗系色に切り替わる。

《Change, MAGIA!!》

まどかとさやかの眼前に、二人の魔法少女が屹立していた。

黒の、黄色の仮面を被る二人。ほむらが盾から明らかに大きすぎる黒い機関銃を取り出し、マミは帽子からいくつもの白い長銃――マミ曰く、マスケット銃と言らしい――を生み出し並べていく。

どちらともなく、ほむらとマミは銃撃を開始した。マミのマスケット銃は一発しか撃てない銃だったが、

が、次々と撃ち棄てては生み出していくことで、ほむらの機関銃に負けない超高速で多数の銃弾を撃ち放っていた。二種の弾丸が壁となり怪人たちに襲いかかる。撃ち抜かれていく怪人たちは、しかし僅かに怯むのみで進撃を止めはしない。

「昨日よりも強くなっている……面倒だわ」

「いやらしいわね」

不快感を示すようにマスケット銃の射撃速度を上げるマミ。ほむらの機関銃を超え、まだ早くなる――！「すげえ……」さやかと同じくまどかも驚愕していた。やっぱり、マミさんは凄い……！

ほむらは機関銃の弾が尽きると、盾から円筒型の物体をいくつか

取り出し、怪人たちの群れへ投げ付けた。ほどなく円筒は弾け、巨大な炎を撒いて怪人たちを焼く。蝶々怪人たちの羽根が燃えタンポポ怪人たちの頭に火が点いたが、それでもなお怪人たちは詰め寄ってくる。マミの超速射撃も足止めにしかなっていない。

「キリがないわね」

「なら、これよ」

ほむらは盾の中から、変身に使ったものとは別の宝玉を取り出した。今はまどかにも分かる——あれはソウルジェムだ。だがほむらのものともマミのものとも違い、そのソウルジェムは右が緑、左が紫に分かれて色付いていた。2色のジェムを盾の中央にはめ込むほむら。何故彼女はいくつも異なるジェムを持っているのか——まどかの疑問は力強い女声にかき消される。

《CYCLONE！ JOOKKEEEEEER！

RE-MAKE UP，W！！》

風が吹いた。足元を抜ける疾風が、ほむらの元に集まっていく。渦巻く空気の中ではほむらの衣装が変化、右が緑、左が紫に塗り代わり、胸元でクリスタル状のネックレスが揺れた。仮面の目も右が緑、左が紫に染まる。

「何アレ……はんぶんこ？」

さやかの眩きが、正中線から紫と緑に塗り分けられたほむらの姿を正しく表していた。

「やあ、久しぶりだね。曉美、ほむら」

聞き覚えのない少年の声が、風に乗って聞こえた。ほむらの仮面、緑の右目が瞬いている。仮面が……しゃべっている？

「貴方は……！」 ほむらは声の主を知っている様子だが、まどかたちには全くわけがわからない。

「何……誰と話してるの？」

「バママミか……君が生きているタイミングとは、実に興味深い。ゾクゾクするねえ」

「……どういう意味!？」

「君の事は既に検索済みだということさ。君の辿る運命もね」

ほむらの身振り手振りまで操る声の主に、仮面のママミは銃を握る手を震わせていた。まどかも少年の声に真意を問いたくなるが、響く怪人たちの不気味な嬌声、今はそれどころじゃない。

「ママさん！ ほむらちゃん!」

「……追求してる間はなさそうね」

「その通りさ。さあ、どうする、暁美ほむら。僕を喚んだのは、何かを調べるためだろう？」

猫背気味に問う素振りをした仮面のほむらは、次には背を伸ばしいつもの直立不動となる。人格が入れ換わるようで、見ているまどかは――（恐らくさやかも）軽く目眩を覚えるほどだ。

「わかったわ。お願い」

「任せてくれ。——では、検索を始めよう」

緑の右目を瞬かせ、仮面のほむらは両手を開く。立ちながら瞑想するような姿勢。

「キーワードを」

「魔女。使い魔。薔薇。蝶」

「数が多くて助かるよ。早速だが——全てを閲覧した」

片手で本を閉じるような仕草をして、仮面のほむらは、いや声の主は右腕の盾を掲げた。盾には緑色の光が宿っていく。

「これは……？」

「ソウルドライバーを使い魔たちに向けるんだ」

「……こう？」

ほむらはその場で右腕を振りかぶり、怪人たちの群れへ突き出した。盾からは緑の光が波のように広がっていき、怪人たちにまで波及していく。光を浴びた怪人たちには、身体のだこかに1箇所ずつ、薔薇に似た黒い紋様が浮かぶ。まどかには見覚えがあった。

さやかも叫ぶ。「あれ……魔女の口付け！」

「そう。魔女の影響下にあるものには魔女の口付けが生まれる。それはあの薔薇の魔女・ゲルトルトの使い魔たちも例外じゃない」

「じゃあもしかして、魔女の口付けを消せば……」

「感じがいいね、鹿目まどか」

声が言葉を次ぐ前に、銃弾が一発、蝶々怪人の一体を貫いている。魔女の口付けが正確に射抜かれ、怪人は鳶の先からバラバラになり、無数の目を生やした蝶々になって散っていく。

マスケット銃を投げ捨てマミが笑む。「こういうことね」

「流石の理解だ、巴マミ。ゾクゾクするよ」

マミは引き続き容赦なく、超速射撃を開始した。それまで無造作に放たれていた弾丸は、マミの狙いで精密に怪人たちの魔女の口付けを裂いて身体をバラバラにしていく。

「さて、今回の僕の役目はここまでかな。これ以上は君のジェムの負担になる」

少年の声は随分と優しく、ほむらを案じている響きだった。

「ありがとう。助けてくれて」

ほむらの声も、まどかたちに向けるのとは違い、とても柔らかい。

「礼は不要だよ。僕もかなり興味深いものを見せてもらったしね」

仮面のほむらは盾に手をやる。ジエムを外すつもりだ——恐らく少年の声は消え去る。

「必要なら、いつでも喚んでくれ。僕も仲間たちも、喜んで力を貸そう」

「ありがとう。でも、私のしていることは——」

「暁美ほむら」少年が告げる。「君は、君の祈りのために、君の全力を尽くせばそれでいい」

「私の……」

「Nobody's Perfectだ。できるだけで構わない」

ほむらは黙したまま。言葉の意味を噛みしめるように。

「さあ、君の戦場が待っている」

「——わかったわ」

盾から2色のジエムが取り去られる。暗系色の衣装に切り替わったほむらは、怪人たちの群れに駆け出していく。

「路を拓いて！」

「っ!!」

マミが中空に数十丁のマスコット銃を並べる。全ての引き金が同時に引かれ、一斉射、狙い撃たれた怪人たちが小さな使い魔に分裂

され、群れに一の穴が開く。その奥には、緑色の植物怪人、胸に薔薇を咲かせた――あれが魔女ゲルトルート？

ほむらは地を蹴り、天に舞い上がる。

《S p e l l i n g E f f e c t , M A G I A ! ! 》

盾に触れたほむらを紫の光が包んだ。

「ハアツ！」

紫光が渦となり吹き出す。足を突き出したほむらはロケットのように飛び出し、薔薇怪人を紫光をまとった蹴り足で貫く。爆撃を受けた怪人は吹き飛び、爆発した。炎が呆然と立ち尽くす使い魔怪人たちを照らす。

「やった……！」 思わず喝采を挙げたさやかは、着地したほむらを見るとすぐにバツの悪そうな表情。マミは爆炎の向こうを見やり、

「いえ……まだよ！」

炎と煙を裂いて、巨大な鳶がほむらを襲った。避けられず、吹き飛ばされる。ほむらの身体は怪人たちの群れから飛び出し地面を転がる。

「ほむらちゃん！」

まどかの声に応えるよう、体勢を立て直すほむら。視線の向こうには、炎の中、背から生やした鳶の触手を振るう薔薇怪人・ゲルトルートの姿。胸の薔薇は挟られて崩れているが、その五体はまだ健

在だ。

ゲルトルートは鳶を振るい、配下の使い魔怪人たちを掴み始めた。他の使い魔怪人やマミに分裂された使い魔たちもゲルトルートの元に駆け集い出す。使い魔たちが怪人になった時のように、群れ集まった怪人たちが一つの巨大な塊になり——弾けた。

現れたのは、巨大な怪物。血の滴る肉塊の胴体からは黒い足が虫のようにいくつも生え、背の蝶々の羽根は薔薇の花で飾られている。高く伸び上がった首の先は、無数の薔薇が咲き乱れる茂みと化して、よく見れば、多数の薔薇怪人が寄り集まって蠢いていた。腸を掴まれたような感触に、まどかの身体が震えていた。さやかも硬直している。

「これが魔女の……」「本当の姿……！」

威容はあまりに強大で、魅入られたまどかたちは薔薇の魔女から目を離せない。その茂みの前で、炎が爆裂する。爆弾——やつと外せた視線の先、魔女の足元には、片手を振り抜いている黒い仮面。

「ほむらちゃん！」

叫ぶ間に、巨大な鳶が薙ぎ払われる。またも暗系色の衣装が宙を舞う。壁に打ち付けられ、崩れた瓦礫と煙の中に消えるほむら。まどかの悲鳴は声にならない。

魔女の頭部、茂みは大きく抉られ緑の破片が散ったが、破片はすぐに寄り集まって元通りの茂みになってしまう。爆発はダメージになっていない。

「曉美さんっ！」 飛び出したマミの空中超速射撃が、弾幕と化して魔女に向かう。魔女は、飛んだ。その巨体を軽々と跳ね上げて、銃撃をかわした。着地したマミは、真上から落ちてくる魔女の巨体から跳んで逃げるしかない。

「あんなの、どうすりゃいいのさ……！」

「わ、わかんないよ……！」

マミは間断無く走り回り、銃を生み出しては棄てつつ撃ち続ける。が、動きのせいか狙いが外れ床や壁を穿つことが増え、当たった弾も魔女の身体にめり込む程度。魔女の素早い動きすら止められない。

魔女の身体から黒い何かが散った。マミは射撃を止めないが、黒は弾幕を縫ってマミに絡み付く。目を凝らすまどか——目のいくつも生えたあれは、蝶々の使い魔だ。羽根をさかんに動かしマミを囲むと、融合して鳶に変わりマミの身体を縛り付けた。そのまま振り上げられ、逆さ吊りにされてしまうマミ。

「マミさんっ！」

「……平気よ」 マミは締め上げられながら、苦悶をこらえなおも笑んでいる。「逆転は……ここからよ」

《RE・MAKE UP・FAIZ!!》

女声が響き、赤い閃光が一条、魔女の世界を駆け抜けた。一閃は薔薇の茂みに突き立つと、花咲くように展開し赤い三角錐となる。

《Standing-by……complete》

舞う塵の向こう、血液を思わせる真紅の流れ（ストリーム）が光り浮かんでいた。晴れていく煙の中、またもほむらの姿が変わっている。光のラインはほむらの全身を這い、仮面をも赤く輝かせていた。目は今は、マミの仮面と同様黄色い光を発している。盾には張り巡らされた赤いラインの目立つ黄色の宝玉が取り付けられ、両手にはこちらにも赤いラインが目立つ、近未来的な機械の大砲が抱えられていた。

魔女はほむらの方を向こうとして身動いだが、それ以上動けない。あの赤い三角錐のせいだとまどかは直感した。

「今よ」

「ッ！」

ほむらの声に、マミの仮面の黄色い目が輝いた。床や壁の弾痕から、魔女の身体にめり込んだ弾丸から、黄色のリボンが伸び上がった。無数の黄色い触手が、意趣返しとばかり魔女の身体に絡み付き、縛り付ける。四方八方から繋ぎ止められた魔女はもう身動きすらできない。

「——惜しかったわね」

マミは笑んで、リボンの一本に蔦を断ち切らせる。空中で解放されたマミは胸のリボンを引き抜くと、長大になったそれを振り合わせ、身の丈より大きなマスケット銃の大砲を生み出す。

《Spelling Effect / FAIZ!!
Exceed Charge!!》

ほむらの触れた盾——ソウルドライバーに嵌められた赤と黄色のソウルジェムから発した赤い光が、ほむらの全身の、手にした大砲のラインを伝い、砲門の先に収束していく。

マスキットの大型を抱えたマミが、そしてほむらが、砲門を魔女ゲルトルートに向けた。

「ティロ！」

「ブラスター！」

「「フィナーレ……」」

轟爆音が重なる。金色の光条と真紅の閃光が、魔女の頭部で交差した。薔薇の茂みを貫き、二筋の光は各々の方向へ駆け去っていく。その輝きは、茂みを構成していた薔薇怪人たちを飲み込み、消滅させた。行動をつかさどる器官を失い、魔女の肉体は分裂して使い魔になろうとして、中空に浮かんだ丸に斜め線の入った赤い紋様がそれを止める。ギリシャ文字の^{ファイ}の^中だ——まどかが気付いた瞬間、魔女ゲルトルートは蒼い炎を噴いて爆発した。

「うわっ！」

さやかともども顔を覆った。炎の熱がマミの障壁さえ越えてまどかたちを燦る。蒼の炎が膨れ上がり魔女の結界を埋め尽くすと、程なく消し飛んで、後には何も残らなかった。

焼け焦げた大地に立つ、二人の仮面の少女。

「マミさん——」「ほむらちゃん——」

まどかたちに歩み寄る二人。その背後で空間が歪み、魔女の結界が消えていく。景色の揺らぎが収まった後は、まどかたちが立ち入った廃墟に近い雑居ビルの光景が姿を見せていた。差し込む夕焼けの陽光——戻ってきたのだ。

「マミさん、あれ……」

何かに気付いたさやかがマミの後方を指し示した。マミは振り向いてその先へ駆け寄るが、ほむらは意に關せず歩み去るのみ。さやかがマミに駆け寄る。まどかも、横を通り過ぎる仮面のほむらを気にしつつ後を追う。

変身を解除したマミは、黒い球状の物体を手に使っていた。上下から針のようなものが伸び、鋭いその先を乗せたマミの手に刺さらないのか心配になる。

「これがグリーンフシードよ」

マミは黒い球——グリーンフシードについて、魔女が時々持つていること、魔法の使いすぎでくすんで穢れたソウルジェムを浄化できることを教えてくれた。やや黒ずんでいたマミのソウルジェムは、触れたグリーンフシードに黒が吸収され、また綺麗な光を発するようになった。

マミはそのグリーンフシードを、ほむらに向かって投げた。

受け取るほむらは、また黒い仮面を被ったままだ。

「まだ十分浄化できる……あなたにあげるわ」

ほむらは黙したまま。

「一緒に得た勝利よ。それも半分はあなたのものよ」

マミの微笑。まどかには、何の曇りも無いように見えた。

だがほむらは、グリーンシードをマミに投げ返した。

受け取ったマミの表情が歪む。

「……施しは受けないってこと？」

「あなたには話したはずよ。それがどういふものなのか」

マミの表情が驚愕に染まる。思い出してはならないものを思い出したかのよう。

「……信じないわ。私は、あなたの言ったことを」

ほむらの仮面がややうつむき加減になる。その複眼に、顔を歪ませたマミがいくつも映る。

「信用できない相手と、一緒に戦えるの、あなたは？」

マミは、沈黙でしか返せない。

「それに、私の予言はまだ変わらない。

今日はその時じゃなかった。あなたが生きているのは、ただそれだけのことよ」

ほむらの言葉に、いよいよマミの表情に怒りが灯る。口元さえ歪め、マミは、

「私は死なないわ！　あなたがいなくても、今日だって勝てたわ！」

「どうかしら。現実には、彼女たちが見ていた通りよ」

ほむらの視線がまどかたちへ移る。まどかはとっさに目を逸らしてしまっただが、さやかはほむらをまっすぐ見据えていた。

「ふざけんな！　ワケわかんない言いがかりつけるなら、さっさと帰れ！」

さやかの剣幕に、ほむらは溜め息を吐いた。さやかの言葉通り踵を返すと、仮面を外し去っていく。その表情は見えない。――背を向ける前に一瞬、まどかに目を留めた以外は。

まどかは仮面越しに、泣きそうになっているほむらを見た気がした。

ほむらの姿はもう、その張った背しか見えない。

「なんだよアイツ。マミさんの必殺技パクったくせに、意味不明なこと言ってマミさん怒らせてさ」

「いいのよ、さやかちゃん」

苛立ちを隠さないさやかには、ほむらは難癖をつけているだけに見えていないらしい。マミは返って冷静さを取り戻し、いつも

の笑みを取り戻していた。まどかは、マミとほむらの間で秘密の会話があったことを察していたが、それがマミにとって不快でしかないことも、察してしまっていた。

（いつか、話してもらえるかな）

期待と不安が胸の中で混ざり合う。話してもらえるとときがあるとするれば、それはきつとまどかが魔法少女になったときだ。マミや、ほむらのような。

……あるいは、仮面ライダーに、なるのだろうか。

「マミさん」 まどかはマミに向き直る。「私、マミさんが勝てそうになかったなんて思わないです。ほむらちゃんだって、きつと一人じゃ勝てなかった。

私、あの女の人を助けたマミさんも、マミさんを助けたほむらちゃんも、どっちも素敵だと思う」

言ってまどかは、ちょっと恥ずかしくなって、次の言葉が言えなかった。——だから、マミさんやほむらちゃんみたいに、誰かの役に立てるなら、それはとっても嬉しいなって。

「こいつ。私だってマミさん素敵だって思ってたんだよー」

「ふふふ……二人とも嬉しいわ。ありがとう」

マミが微笑む。ほむらに向けた微笑みよりも、ずっと素直な笑顔で。

「行きましょう。あの女の人、そろそろ起きるわ」

マミの言葉で、まどかたちはその場を後にする。夕日に照らされた三人の影がどこまでも伸びる。

まどかたちは聞き逃していた。その場になぜか残ったキュウベエの呟きを。

「暁美ほむら……複数のジエムを使う魔法少女……例の無いイレギユラー……僕の計画に障るね」

暮れていく陽にかける廃屋の中、二つの赤い瞳が爛々と煌いていた。

第2話「街を泣かせる闇」（後書き）

次回、仮面ライダーマギア！

「もう、何も、怖くない」

「あなたの言うことを信じたら、壊れるしかないもの」

「マミさん！！」

「本当に、私と一緒に戦ってくれる？」

「予言は、自分の力で覆さなければ」

「マミさんは、もう一人じゃありませんよ」

「私はもう一度、天の道に背く！」

H Y P E R - C L O C K - U P !!

第3話「運命の切り札」

——重ねる力で、悪夢^{みらい}を壊せ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6703r/>

仮面ライダーマギア -Masked Rider Magia-

2011年10月8日18時10分発行